

開催地名	兵庫県明石市
開催日時	令和6年1月17日（水） 14：00 ～ 15：30
開催場所	明石市役所8階 806会議室
語り部	蔵原 正敏 （熊本県宇城市）
参加者	明石市職員 60名
開催経緯	本市が経験した兵庫県南部地震から約30年が経過し、職員の中で防災対応への意識が風化しつつある。関西で最重要視すべき南海トラフ地震では、揺れだけでなく津波の浸水も予測されている。 日常業務の中でも防災についての視点を取り入れて臨めるよう、今一度、職員の防災意識の向上を図りたい。
内容	平成28年熊本地震について （1）発災当時の状況 宇城市は昔から風水害の多い地域であり、風水害に対してはある程度対応策が講じられていたのだが、地震に対しての対応策という点では弱かった。当時の地震においては、大小合わせて合計1,465回の揺れがあり、日が続つにつれてじわじわと被害が拡大していった。 当時自宅にいたが、揺れの10分後に車で登庁し、最初の揺れから2時間後には約8割の職員が集まった。初動では何をしたのか記憶にないほど夢中で指示をしていた。2日目の朝からは、より細かく被災者の安否確認や所在、要支援者の情報をできるだけ集めた。このとき本当に助かったのが消防団の存在である。宇城市では約1800人の団員数であったが、発災後に関しては、10日間で延べ1万人の団員が復旧活動に動いてくれた。2日目には、ある程度ではあるが体制が整いだしたところで、3日目に本震に襲われてしまい、また同じ作業を繰り返すこととなった。被害状況、被害総額は想像を絶する事となった。 （2）職員への対応について 多くの職員は避難所の運営や被害認定調査・罹災証明書の発行業務などに追われ、支援物資については、はじめの3日間は物資を調達することに苦慮し、支援物資が届き出すとスペースを確保することに苦慮した。また深夜に物資が到着することも多く人手不足が顕著に表れた。

発災を体験して今後の防災対策で伝えたいことは、『完全に体を休ませる日を作るローテーションを作ること』である。被災状況にもよると思うが、動き続けられないといけな
い状況に陥ってしまうが、寧ろ逆である。その責任感で動き続けていても休息を取らな
ければ、各々の判断力が鈍ってしまい、その結果被災者支援に支障を来してしまう。ま
た避難所運営や証明書発行の業務が増えてくると同時に、市民からの苦情対応なども含
め、本来の業務以外での対応が多岐に渡るようになる。そこで考えられることは、職員
の心的なストレス負荷の問題である。普段では想像を絶する、計り知れないものとなっ
てくるので休暇ローテーションはぜひ取り入れてもらいたい事案である。

(3) 今後の課題

地域防災計画では業務に応じて担当を決めていたが、実際には違う内容であることが
多いため、マニュアルの整備、業務担当の見直しが必要であった。

何でも全て行政で。という方針になりがちであるが、民間企業や自治体と災害協定を
結んでおくべきである。例えば避難所開設や運営を民間企業に委託するというのも良い
例であるとする。特に物資の運搬については、プロの手を借りられると負担も軽減で
き、本当に良い結果に結びつくとする。そして何よりも、住民ら自らの避難訓練、避
難所運営訓練や防災に対する意識を常に持つなど、個人で意識しておくことが大切であ
る。



開催地より

実体験を基に、時系列にまとめてお話し頂いた。もっとこうすれば良かった、という
反省点も率直にお話し頂いたことで、発災時のイメージが湧き、職員としての心構えを
見直すきっかけになった。日常業務の中でも防災についての視点を取り入れて臨めるよ
う、今一度、職員の防災意識の向上を図りたい。